

花をこたふるの

あじさいの花 金師ビニクと書いていた

ふじの花もいろく

花むらの気が ムラサキにまつていゝ花

ビニクと白の花むらか子レマの花

これ本岩にあじさいの石

と思ふ白一色の花むらか子にむらか子

ひとつがわたまり木も上存していゝ花

いさあひまふ 同じまうた 咲かすの

と言ひたくる

あじさいの葉が芳ばえ えあは

しげうくは 石がりの にと不出来う

ところで

このあじさいの存在を 確認した人は

えんりの 石を人けあじさいの

かかろるるし

知らんふりて 通りすきてい

ういふルと上あつ 湯あかし 晴れと

同じに見えぬあじさいの

高さが七十センチほど だまの花か

咲かすいしは

目と入るいようだ

人はきつくと気がつかない

それだけなのだ

それいふ花ねと

思うと思われるもその人の心だ

物に訴える感じ方を変えてはみる

私の中に花は美しいとの考えがわる

花がどうでもいいとまぶる

人は同じでないと知っていいのわ

自分の考えを思いはとうりながら書き知る

26.24  
5/17